

社会技術研究開発事業  
平成21年度研究開発実施報告書

研究開発プログラム「科学技術と社会の相互作用」

研究開発プロジェクト名

「アクターの協働による双方向的  
リスクコミュニケーションのモデル化研究」

研究代表者 飯澤 理一郎  
(北海道大学大学院農学研究院、教授)

## 1. 研究開発プロジェクト名

「アクターの協働による双方向的リスクコミュニケーションのモデル化研究」

## 2. 研究開発実施の要約

### ①研究開発目標

社会的合理性と科学的合理性がせめぎあいを繰り返している現場において、一般市民を含む多くの関与者と協働しながら対話や議論を深め、研究者の社会的リテラシーと一般市民の科学リテラシーを共に高めるとともに、双方向的リスクコミュニケーションのあり方を生活者の側から問い直し、説得ではない各層の納得のいくリスクコミュニケーションのモデルを導き出すことを目標とする。その過程で行うGM juryは単なる社会実験ではなく、宣言を政策決定者側に接続させることをも目指す。初年度の第一段階では、研究参加者間で問題意識の共有を図り、続く第二段階では五つの実施項目に着手した。

### ②実施項目 目標達成のため、研究参加者間で問題意識を共有した後に取り組む課題。

- 【課題1】 BSE全頭検査問題における市民参加を旨とした対話手法の選択と確立。
- 【課題2】 研究者の社会リテラシーと一般市民の科学リテラシーとの接合を図る。
- 【課題3】 メディアとの協働を試みる。
- 【課題4】 GM juryを開催する（社会実験から社会への実装可能性をも探る）。
- 【課題5】 双方向的リスクコミュニケーションの生活者視点からのモデル化を行う。

### ③実施内容 各課題の特性を把握し、運営組織と関与者のネットワークを構築した後、

- 【課題1】 BSE全頭検査問題をめぐる過去の振り返りを含む小規模な対話の場を創設し、
- 【課題2】 学習会併置型熟議の場と農学交流広場の開設準備を行い、実際に開催し、
- 【課題3】 市民—メディア—研究者による車座討論会の開設準備をし、
- 【課題4】 研究参加者によるGM jury関連の文献調査と関心喚起の取り組みを行い、
- 【課題5】 課題1～4がモデル作成に向けて寄与するとの認識を共有（第一段階）する。

### ④主な結果

- 【課題1】 はなしてガッテンプロジェクトとして、BSE全頭検査問題を振り返る場を帯広地区で創設し、1月と3月に開催し、第2年次の継続も決定した。小規模で非公開を前提とし、行政・獣医師・酪農家・コープさっぽろ理事らの協力と参加があった。
- 【課題2】 ①札幌消費者協会「食と健康を考える会」と一緒になって学習し討議する場を開設し、3月に試行版を行った。②北海道大学周辺地区を中心に研究者と市民との平たい交流場を開設する準備をし、第1回目が5月開催となった。
- 【課題3】 新聞記者、テレビ局ディレクターらを中心に、プロジェクトの説明と車座討論会の意義を説明し、札幌圏での6月開催に向けて準備に入った段階である。最初は非公開から始めるが、公開へのプロセスが検討課題になると認識されている。
- 【課題2 + 3】 興部に新聞記者と主婦も交えた学習し討議する車座討論会を開設した（3月）。
- 【課題4】 GM juryに向けた関心喚起として、3月13日に北海道GMO問題を振り返る場を催した。文献調査は2003年イギリスのGM jury（PEALS 2003）報告書ほか。
- 【課題5】 コープさっぽろとリスクコミュニケーションのあり方について討議する場を設ける方向で調整に入った（2月）。これは、GM juryへの接続も兼ねている。

### 3. 研究開発実施の具体的内容

#### (1) 研究開発目標

社会的合理性と科学的合理性がせめぎあいを繰り返している現場において、一般市民を含む多くの関与者と協働しながら対話や議論を深め、研究者の社会的リテラシーと一般市民の科学リテラシーを共に高めるとともに、双方向的リスクコミュニケーションのあり方を生活者の側から問い直し、説得ではない各層の納得のいくリスクコミュニケーションのモデルを導き出すことを目標とする。その過程で行う GM jury は単なる社会実験ではなく、宣言を政策決定者側に接続させることをも目指す。

平成 21 年度は、初年度として研究参加者間で問題意識の共有を図り（第一段階）、次いで、実施項目（課題 1～課題 5）に着手することを目指した。各課題は研究の全期間を通して段階的に（課題 5 のみ第六段階）実践されるが、平成 21 年度は第二段階の途中までを行うこととした。

#### (2) 実施方法・実施内容

運営委員会は研究統括グループとアドバイザーボードの一部から構成される。研究代表者は委員長として毎月 1 回定例運営委員会を主催し、研究の進展に関し責任を持つ。研究統括グループが最終的にリスクコミュニケーションのモデル化を行うのだが、実際の研究活動の企画と運営を行う主体は、グループリーダーを中心とした熟議型対話手法開発グループと情報発信グループである。前者は手法の開発（改良）や選択と社会実験に責任を持ち、後者はプロジェクト全体の情報発信と農学交流広場に責任を持つ。いずれの課題も両グループの協力の下に行われ、事前報告も含め、運営委員会で逐次実践報告される。また、メディアとの車座討論会や GM jury 及び BSE 問題での対話は、研究協力者や様々な関与者らとの協働作業として進行する。

北海道庁農政部食の安全推進局食品政策課及び十勝支庁との緩やかな連携を推し進め、札幌消費者協会や北海道消費者協会との間で GM jury に関する情報交換や学習会を行う方向で調整されつつある。また、コープさっぽろ組合員活動部とは、リスクとは何か、消費者目線でのリスクコミュニケーションとはどういったことをめぐって、学習会兼意見交換会を行うことにした。これらは、いずれも GM jury を目指しての取り組みに収斂されていくという位置づけである。

最初の2ヶ月間は運営委員会を立ち上げ、研究の分担を確認し研究目標を共有することに費やした。各課題は研究開始時点で既に軌道に乗っていたものもあれば新たに構築しなければならないものもあった。例えば、ある程度進んでいたコープさっぽろとの緩やかな連携は、コープ側の大幅な人事異動の影響を受けて、窓口担当の10月着任を待ってからになった。人材の紹介等では進捗状況に影響は出なかったが、GM jury に関する説明のし直しは、2月にずれ込んだ。

これとは反対にBSE問題では、十勝支庁との緩やかな連携が既に機能しており、未来を思い描く為に過去を思い出す作業への理解が得られた。また、行政側の思惑として、語り合いを通して得られた知見をもとに、BSE全頭検査問題での「大規模対話フォーラム（※）」や「コンセンサス会議」の開催可能性を探ってみる心積もりがあるようだ。

※ 大規模対話フォーラム： RISTEX「21世紀の科学技術リテラシー」プログラム  
平成17年度採択研究「研究者の社会リテラシーと非専門家の科学リテラシーの向上」で提唱された、対話の三段階モデルの最終段階。討論者グループの討論結果

を傍聴者グループが検討し、さらにその結果を討論者グループが議論し、討論者と傍聴者の共同宣言として発表されるという会議設計である。

小規模対話で課題を共有し、円卓会議で課題群の中から今討議すべき課題を決定し、その討議項目を大規模対話で取り上げる。そこでの結果を共同宣言という形で公表し、北海道食の安全推進局に手渡した。

#### <実施項目、手法、内容、進捗状況>

##### 【課題1】 BSE全頭検査問題における市民参加を旨とした対話手法の選択と確立。

質的に量的に異なる対話を段階的に積み上げることでBSE問題を解きほぐすことができるかどうかの調査を行い、解きほぐしにつながる可能性が見えたなら、対話参加者間の納得のいく範囲で議論を集約して行政へ提言を行う。熟議型対話手法開発グループが中心となって対応する。北海道ではGMO問題とBSE問題は飼料の問題を通して結び付けて語られることがあり、この実践を通し、多くの道民に【課題4】のGM juryへの関心をもってもらいたいと期待している。

行政・獣医師・酪農家・コープさっぽろ等に働きかけて、非公開を前提とした「BSE問題を振り返る（過去を再検討）」ための小規模な語り合いの場を創設し、語り合いを深めてからではあるが、第2年次以降には「将来に向けての対話」の場の創設を試みる。

はなしてガッテンプロジェクトとして、BSE全頭検査問題を振り返る場を帯広地区で創設し、1月と3月に開催し、第2年次の継続も決定した。小規模で非公開を前提とし、行政・獣医師・酪農家・コープさっぽろ理事らの協力と参加があった。進捗状況は初年度計画通りに進展している。

##### 【課題2】 研究者の社会リテラシーと一般市民の科学リテラシーとの接合を図る。

学習と「学び手側からの問題提起や質問」を踏まえた意見交換を通し、GM juryに向けた道民の関心喚起を期待した課題である。課題は、①熟議型対話手法開発グループと大学外部の団体やグループとが協力して、食の安全安心を幅広く考えるための学習会併置型熟議の場を作り、②本研究情報発信グループを中心とした農学交流広場を作ることによって遂行される。これらは両リテラシーの交差する場であると同時に、GM juryに向けた関心喚起の場にもなっている。

①では、札幌消費者協会「食と健康を考える会」と一緒になって学習し討議する場を開設し、3月に試行版を行った。②では、農学をテーマに北海道大学周辺地区を中心とした研究者と市民との平たい交流の場を準備中で、第1回目の開催は5月である。進捗状況は、②の準備を丁寧に行った分だけ実際の展開が少し遅れたが、ほぼ初年度計画通りに進んでいる。

##### 【課題3】 メディアとの協働

GMO問題やBSE問題を伝えるメディアの姿勢と情報の受け手としての市民の姿勢、そして科学的情報を提供する側としての研究者の姿勢とを重ね合わせ、「伝える—受け取る」関係を考察する場として、市民—メディア—研究者による車座討論会を開設する。GM市民陪審に向けての関心喚起の意味も持っており、2013年に予想される「BSE清浄国宣言」を前にした冷静な議論を生み出す素地ともしたいと考えている。

新聞記者、テレビ局ディレクターらを中心に、プロジェクトの説明と車座討論会の意

義を説明し、札幌圏での6月開催に向けて準備に入った段階である。最初の立ち上げメンバーの一人（報道側）の道外転勤に伴い、実際の進展が遅れている。最初は非公開から始めるが、公開へのプロセスが今後の検討課題になると認識されている。

#### 【課題2＋課題3】

興部地区に学習会併置型熟議の場を開設した（3月：第1回全体会合は4月9日）。そこに新聞記者（個人の資格で参加）が参加しているので、メディアとの車座討論会の要素が加味されることになった。今後の課題は、如何にして【課題4】に接続させるかである。興部を選んだ理由は、当地が農業・漁業・酪農畜産業がバランスよく展開しているということと、本件が地方自治の問題とリンクするという認識をアドバイザーボードへの参加者（鳥井啓一：興部町出身）が認識していたことによる。

#### 【課題4】 GM jury（社会実験から社会への実装可能性をも探る）。

日本の裁判員制度や海外で展開されたGM juryを参考にしながら、北海道が抱えている問題を直視した上での、我々が日々暮らす社会の中での「GM市民裁判」を開催する。ただし、GM作物（食品）の良し悪しや、食べて安全／危険といった二項対立的な判断を問う枠組みは取らない。

北海道ではGM作物の栽培問題は、一部の大規模農家から栽培を求める声が出る一方、一部の小さな地域ではGMフリー宣言が出されるなどしており、問題は意見の異なる二つの領域に分断されている状況にある。そこで、この領域に挟まれる普通の人々に参加を求めて、この分断された状況に対し、食卓の問題と農場の問題をつなげた視点から一定の評価を下す場を設けることを考えた。これは確かに社会実験ではあるが、同時に社会への実装可能性を秘めた取り組みである。

初年度は、研究参加者による欧米文献調査と北海道でのGM問題とは何だったのかを思い出し、GM juryに向けた関心喚起のための催し物を企画する。具体的には、3月13日に北海道GMO問題を振り返る場を催した。文献調査は2003年イギリスのGM jury（PEALS 2003）報告書ほかを参考にしているところだが、裁判員制度の文献調査までは行っていない。消費者協会やコープさっぽろ等への働きかけは一通り済ませたが、具体的行動へ向けての青写真を作成している段階である。これは次年度の早い時期に着手する必要がある検討課題である。

#### 【課題5】 双方向的リスクコミュニケーションの生活者視点からのモデル化を行う。

研究最終年度に、双方向的リスクコミュニケーションを生活者の視点からモデル化する。その第一段階として初年度は、【課題1】から【課題4】の実践がモデル作成に寄与するとの認識を、運営委員会が共有することを目指す。コープさっぽろとリスクコミュニケーションのあり方について討議する場を設ける方向で調整に入った（2月）。これは、【課題4】のGM juryへの接続も兼ねている。また、【課題2】の札幌消費者協会「食と健康を考える会」グループとの対話の場もまた、生活者の視点からのリスクコミュニケーションの「モデル化」に接続するものであり、対話とは別に、その代表者らとのリスクコミュニケーションとは何かという話題に取り掛かった段階である。

(3) 研究開発結果・成果

【課題1】 BSE全頭検査問題での対話手法の開発と選択。

BSE全頭検査問題は「リスクとは何か」「生活者にとってリスクコミュニケーションはどうあってほしいか」といったことを考える上で、北海道では避けて通れない問題だという認識の下、研究参加予定者（門平睦代）との意思疎通を図るため、および十勝支庁との相互に独立した緩やかな連携を図るために、熟議型対話手法開発グループは研究開始前ではあったが帯広でプレ協議を行った（8月28日）。支庁から2名のオブザーバー参加を認められた。

「非公開の語りの場」に参加してもらった酪農家や農家の選択を十勝支庁に依頼し、また、消費者の選択をコープさっぽろ（帯広地区と札幌地区から）に依頼した。他者の話に耳を傾けることができるということを、人選の基本とした。なお、酪農家の日々の作業の時間配分を考え、昼時を挟む時間帯に会合を設定した。BSE問題では、各々の立場からの過去の振り返りが必要だとの視点から、「過去を直視し、そこから未来を構想しよう」との共通認識を持つに至り、下表のような振り返りの場が2回開催された。なお、北海道が全頭検査の継続を決めているという大枠の中での開催趣旨は、次の通りである。

- ①「BSE問題発生時の状況を各自の立場（組織も含め）で振り返り、辛かったこと・恐れたこと・困惑したこと・憤ったこと・悲しんだこと・知りたかったこと等について意見を交換し合い、参加者の間で情報や気持ち等の共有を目指す」
- ②「全頭検査の科学的意味・社会的意味・心理学的意味・経済学的意味・歴史的意味などを話し合える場が創れるかどうかを探る」

くはなしてガッテンプロジェクトin 帯広「振り返れば、未来」>

	小テーマ	内容と手順	結果
第1回 2010年 1月13日 十勝プラザ 11:00~ 14:45	発生当時、パニック状態と思われた当時、様々な立場や思いがあったことを先ず共有する	<ul style="list-style-type: none"> <li>■BSE発生当時を思い出す作業</li> <li>■ランチミーティングを加える</li> </ul> 招待参加者（6人）学生（1人） オブザーバーの行政（2人） 研究参加者（4人） <ul style="list-style-type: none"> <li>■資料を見てキックオフスピーチを聞いた後、2グループに分かれKJ法によって、</li> <li>・過去の印象・考えを思い出す</li> <li>・BSE問題で利害関係者が向き合う場を継続する場合何が必要かを語る</li> <li>・問題や課題の発掘作業をする</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■専門家は人々が何をリスクと思っているのかを、何であれば安心なのかを知りたいと思っている。</li> <li>■人々はBSE発生後に取られた「BSE牛の蔓延状況把握」や「BSE牛のフードチェーンからの除去」に関する様々な対策とその結果について、十分に・的確に伝えられ、知っているよという風には認識していない。</li> <li>■正しい情報の伝え方・受け止め方とは何か？</li> </ul>
第2回 2010年 3月13日 十勝プラザ 11:00~	研究者（疫学者/獣医師）が感じた当時の苦悶や疑問などを語	<ul style="list-style-type: none"> <li>■BSE検査が全頭検査として行われることになった時、疫学者として疑問に思ったことを語る</li> <li>■BSE検査が全頭検査として行わ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■サーベイランス・スクリーニング・モニタリングなどの「用語」の混乱。</li> <li>■全頭検査とは何だったのか。当時と現在、どのよう</li> </ul>

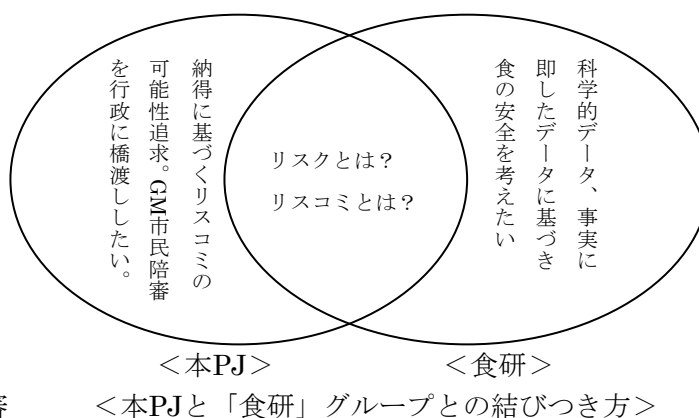
14 : 45	ってもらう	れることになった頃を思い出し、試験研究を行う研究者の視点から当時の状況を語る	に人々はイメージしたのか？違いを共有する。
---------	-------	--	-----------------------

なお、第2年次の4月と6月に3回目（酪農家）と4回目（消費者）が予定されている。今後の課題は、非公開の場をどのようにして公開の場にするかということである。この公開とは、誰にでも開かれた場にするという意味と、HP上での公開の仕方という意味である。後者に関しては、情報発信グループとの協議が始まったところである。

### 【課題2】研究者の社会リテラシーと一般市民の科学リテラシーとの接合。

学習と「学び手側からの問題提起や質問」を踏まえた意見交換を通し、GM juryに向けた道民の関心喚起を期待した課題である。課題は、①熟議型対話手法開発グループと大学外部の団体やグループとが協力して、食の安全安心を幅広く考えるための学習会併置型熟議の場を作り、②本研究情報発信グループを中心とした農学交流広場を作ることにによって遂行される。これらは両リテラシーの交差する場であると同時に、GM juryに向けた関心喚起の場にもなっている。

①学習会併置型熟議の場（本年度実践できた分）： 札幌消費者協会「食と健康を考える会（食研）」と一緒に、学習し討議する場を開設する準備を行い、3月11日に部分的な試行版を行い、2年次の5月13日に健康食品や栄養強化食品に関する考え方を深めるために「アミノ酸」学習会を行うことになった。同会は、平均年齢こそ高いが、自らが調べ、討論するという気風を持ち合わせている。また、リスクをどのように受け止めるか、得た情報を生活の中における様々な選択の場でどのように活かすか、という課題を抱えているので、同会との学習会併置型熟議の場作りの協働作業は、GM市民陪審に向けての熟年の側からの人的リソースとなり得る。熟議型対話手法開発グループを中心に実践している。



②農学交流広場： 情報発信グループは、幅広い農学をテーマに北海道大学周辺地区を中心とした研究者と市民との平たい交流の場を準備中で、第1回目の開催はコンポストをテーマに2年次の5月6月24日に開催することが決まっている。手法開発グループがこれまで積み上げてきたノウハウを駆使し、場の雰囲気作りを行った所である。今後の課題は、どのようにして広場への参加者にGMOやBSEの問題に関心をもってもらうかと、研究室組織に組み込まれている若手研究者のまきこみ方である。

### 【課題3】メディアとの協働

GMO問題やBSE問題を伝えるメディアの姿勢と情報の受け手としての市民の姿勢、そして科学的情報を提供する側としての研究者の姿勢とを重ね合わせ、「伝える—受け取

る」関係を考察する場として、市民—メディア—研究者による車座討論会を開設する。GM市民陪審に向けての関心喚起の意味も持っており、2013年に予想される「BSE清浄国宣言」を前にした冷静な議論を生み出す素地ともしたいと考えている。

新聞記者、テレビ局ディレクターらを中心に、札幌圏での6月開催に向けて準備に入った段階である。最初の立ち上げメンバーの一人（報道側）の道外転勤に伴い、実際の進展が遅れている。最初は非公開から始めるが、公開へのプロセスが今後の検討課題になると認識されている。開設までの準備は熟議型対話手法開発グループが行うが、実際の運営は情報発信グループと協力し合っている。

#### 【課題2＋課題3】 興部版「市民—メディア—研究者」車座討論会。

興部地区では学習会併置型熟議の場に新聞記者（個人の資格で参加。そこでの議論をダイレクトに記事にすることはしない）と興部町立の調査試験研究機関の研究者が参加し、かつ漁業者や主婦らが参加しているため、リスク認知にギャップのある参加者集団となっており、ここでの語り合いや話し合いの動向が注目される。今後の課題は、どうやったら【課題4】のGM市民陪審やBSE全頭検査問題での議論の積み重ね（帯広）に接続させることができるかどうかである。

#### 【課題4】 GM市民陪審

日本で裁判員制度が始まった状況を受けて、欧米で展開されているGM juryを参考にしながら、北海道が抱えている問題を直視した上での、「日本の裁判員制度に依拠したGM市民裁判」を開催する。ただし、GM作物（食品）の良し悪しや、食べて安全／危険といった二項対立的な判断を問う枠組みは取らない。

北海道ではGM作物の栽培問題は、一部の大規模農家から栽培を求める声が出る一方、一部の小さな地域ではGMフリー宣言が出されるなどしており、問題は意見の異なる二つの領域に分断されている状況にある。そこで、この領域に挟まれる普通の人々に参加を求めて、この分断された状況に対し、食卓の問題と農場の問題をつなげた視点から一定の評価を下す場を設けることを考えた。

しかし、コンセンサス会議のような市民の提案といった形をとらない。2012年以降に、2回目の「北海道GM条例」見直しが行われるので、「北海道食の安全安心委員会」及び同委員会付置の「GM専門部会」で討議すべき具体的項目として「判決」を受け取ってもらい、実際に議論してもらおうことを目指す。これは確かに社会実験ではあるが、同時に社会への実装可能性を秘めた取り組みである。

初年度は準備段階として、①研究参加者によるイギリスのGM jury（PEALS 2003）報告書などの欧米文献調査を行い、日本の裁判員制度をGMO問題に当てはめる場合の文献調査に取り掛かったところである。また、②GM juryに向けた関心喚起のための「北海道GMO問題を振り返る場」を、3月13日（土）に開催した。見えてきた課題は次の四つに要約される。

- 安全VS危険等の枠組みを極力排除したが、議論はその方向へ流れがちに推移した。議論の枠組みの設計が今後のGM jury準備の鍵となる。
- 議論の枠組みを決めるためにステークホルダーによる円卓会議等が考えられるが、「誰が円卓を囲むか？」といった参加者資格問題も課題となる。
- GM作物や食品に関する知識の差、GMO問題を知っている人と知らない人との溝

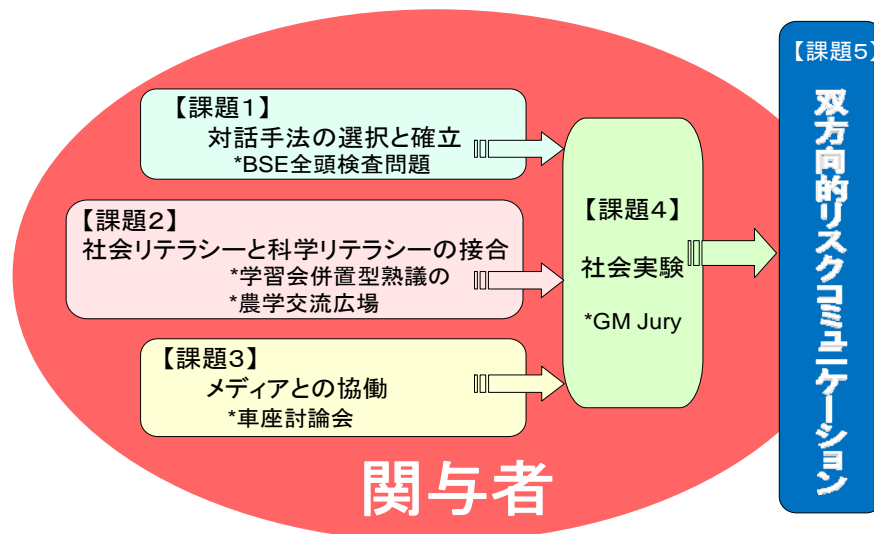
の拡大（地域によっていわゆる「北海道GM条例」の認知度にも大きな差がある）

消費者協会やコープさっぽろへの働きかけは一通り済ませたが、具体的行動へ向けての青写真を作成している段階である。特にコープさっぽろとの「リスクコミュニケーションのあり方」に関する学習会併置型熟議に場は、GM市民陪審に向けた関心喚起であると同時に、熟議の場を豊かにし、リスクコミュニケーションモデル作りにおいても貢献するだろう。これは統括グループにおいて、次年度の早い時期に着手する必要がある検討課題だと認識され、対話手法と情報発信のグループに展開を急がせている。

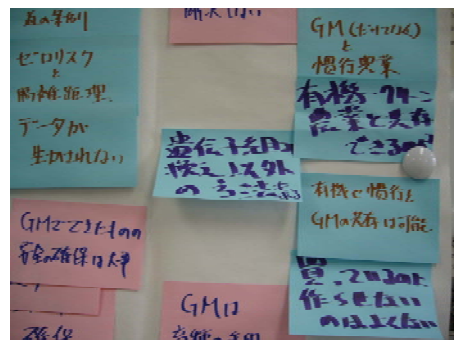
【課題5】 双方向的リスクコミュニケーションの生活者からのモデル化

研究最終年度に、双方向的リスクコミュニケーションを生活者の視点からモデル化する。その第一段階として初年度は、BSE全頭検査問題での対話のあり方からGM juryの実践がモデル作成に寄与するとの認識を、運営委員会が共有することを目指す。

コープさっぽろとリスクコミュニケーションのあり方について討議する場を設ける方向で調整に入った（2月）。これは、【課題4】のGM juryへの接続を意図し、【課題2】の札幌消費者協会「食と健康を考える会」グループとの対話の場もまた、生活者の視点からのリスクコミュニケーションの「モデル化」に接続するものである。



<研究の概念図>



< GMO振り返りの場：3月13日 >

< 参加者の声：3月13日 >

主な行事（ワークショップ形式のものや検討会等は（4）にまとめて記載）

年月日	行事名	内容
平成 21 (2009)		
10月8日	第1回運営委員会	研究内容と進め方に関する確認
10月31日	食と医療の安全に関わる市民講座 「プリオンはもう怖くないの？」	市民講座実行委員会と共同で参加者と専門家へのアンケート調査を実施
11月2日	2009サイエンスアゴラ	「グローバルな市民参加への挑戦～温暖化世界会議の報告」を傍聴し、参加型手法 DOP に関する情報収集
11月6日	打ち合わせ	富良野市役所、富良野サテライトと情報交換
11月6日	北大農学研究院・道立農試連携協定に基づく研究者の技術交流会議	道立試験場研究者への協力依頼と情報収集
11月9日	第2回運営委員会	活動経過と進捗状況報告、各課題の検討
11月13日	札幌消費者協会：食と健康の学習会	<ul style="list-style-type: none"> <li>■クローン牛、BSE 研究に関する最近のトピックを学習</li> <li>■消費者協会「食と健康を考える会」との打ち合わせ</li> <li>■道立畜産試験場研究者との打ち合わせ</li> </ul>
11月16日	第3回北海道食の安全・安心委員会	委員会を傍聴 議題：北海道食の安全・安心基本計画 北海道食育推進計画「どさんこ食育推進プラン」
11月19日	打ち合わせ	札幌消費者協会（事務局長）への協力依頼
11月19日	打ち合わせ	道庁食の安全推進局（局長、課長、主幹、主査）への協力依頼
12月1日	打ち合わせ	メディア車座討論会準備（テレビ局報道部デスク、新聞記者）
12月2日	打ち合わせ	内閣府食品安全委員会アフタヌーンカフェ話題提供者派遣について
12月3日	打ち合わせ	北海道消費者協会（事務局次長）への協力依頼
12月4日	食品安全委員会アフタヌーンカフェ	～「安全な食べもの」って何だろう？に話題提供者として参加
12月8日	第3回運営委員会	活動経過と進捗状況報告、各課題の検討
12月9日	苫小牧消費者協会学習会	GM リスクコミュニケーションに関する情報収集
26, 27日	RISTEX 領域全体会議（通称：合宿）	課題・情報等の共有及びプロジェクト間の連携深化とネットワーク構築
平成 22 (2010)		
1月14日	打ち合わせ	大学と地域の連携：札幌市まちづくりセンター（桑園・鉄西）センター長
1月15日	第4回運営委員会	活動経過と進捗状況報告、各課題の検討
23, 24日	シンポジウム（CoSTEP）	「日本の科学技術コミュニケーションのこれから」での情報収集
2月6日	シンポジウム（CoSTEP）	RISTEX21 世紀の科学技術リテラシーシンポジウム：情報収集
2月8日	第4回北海道食の安全・安心委員会	委員会の傍聴（江別市地域の取り組み、学校給食について）
2月10日	打ち合わせ	大学と地域の連携：（Eco カフェ、桑園まちづくりセンター）
2月16日	打ち合わせ	第2回桑園地域交流ネットワーク会議にて情報交換
2月19日	第5回運営委員会	活動経過と進捗状況報告、各課題の検討
3月2日	打ち合わせ	ホクレン（食品安全・安心推進課課長補佐）との情報交換
3月16日	打ち合わせ	第3回桑園地域交流ネットワーク会議にて情報交換
3月24日	第6回運営委員会	活動経過と進捗状況報告、各課題の検討

年月日	名称	場所／参加者	概要
2009年11月17日	はなしてガッテンプロジェクト「BSEミーティング」	北海道大学農学研究院 参加者：門平を含む熟議メンバー	目的：帯広にBSE全頭検査問題を議論する場を作るための協議。 内容：「振り返れば、未来」として開催する語り合いの場の枠組みと今後の展開を議論する。
12月1日	農学交流広場検討会	北海道大学農学研究院 情報発信グループ中心	研究者と市民による双方向の学習の場の可能性を検討する。
2010年1月4日	はなしてガッテンプロジェクト「BSEミーティング」	北海道大学農学研究院 参加者：門平を含む熟議メンバー	目的：第1回「振り返れば、未来」の会議設計の確認と修正。 内容：第1回「振り返れば、未来」のタイムスケジュールを調整し、内容の確認を行う。
1月13日	第1回「振り返れば、未来」	帯広市 十勝プラザ  参加者：獣医師、農協、酪農家、消費者、行政	目的：BSE問題発生時の頃の状況を思い出し、過去の共有を図る。 内容：一人による語りと、全員による語り合いを組み合わせ、異なる立場の人による過去の語りを傾聴する。
1月22日	興部ミーティング	北海道大学図書館内一室（鳥井氏＋事務局）	理解度に差があるグループで、記者が参加した場合の会議設計を検討する。
2月4日	GMOミーティング	北海道大学農学研究院 参加者：代表を囲んで芝池を含む熟議グループと情報発信グループ	旧プロジェクトの大規模対話フォーラム共同宣言経験者の声として、次のステップのあり方をどうするかという議題で意見交換した。
2月22日	コープさっぽろ提案会議	コープさっぽろ本部 （組合員活動部部長）	リスクコミュニケーションのあり方を協働で模索する試みについて。
3月13日	GMO振り返りの場	北海道大学学術交流会館 参加者：一般募集＋これまでに関わった人たちを中心に招待	目的：2003年から2009年までの北海道GMO論争を振り返り、違った過去が見えることを共有する。 内容：円卓を囲むメンバーによる互いの語りを傾聴し意見交換する。
3月17日	第2回「振り返れば、未来」	帯広市 十勝プラザ  参加者：獣医師、農協、酪農家、消費者、行政	目的：BSE全頭検査が始まった時を思い出し、過去の共有を図る。 内容：研究者（疫学、獣医師）それぞれの経験と思いを語る。傾聴と全員による語り合いとの組み合わせ。
3月29日	興部版車座討論会準備会	北海道大学図書館内一室 （鳥井氏＋事務局）	主婦、研究者（町立研究所）、主婦、漁業者、酪農家、新聞記者を中心に食の安全がテーマの車座討論会を設立。

(5) 研究開発実施におけるその他の活動

- 2009年10月31日開催、食と医療の安全に関わる市民講座「プリオンはもう怖くないの？」にて、市民講座実行委員会と共同で参加者と専門家へのアンケート調査を実施
- 大学隣接の札幌市まちづくりセンターや地域交流ネットワークとの連携（本プロジェクトイベント等に関して、町内会組織を利用した広報支援、ネットワーク会議での情報交換が可能）
- 2009年10月29日。三大学連携事業が開講する食の安全基盤学で「安心のリスクコミュニケーション」を1時間分担当（吉田）。これは、三大学連携での取組みに協力したのだが、TV会議システムを使って帯広畜産大学と酪農大学に接続しているため、リスクコミュニケーションモデルの再構築とGM juryへの関心喚起をねらった。

4. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況

杉山滋郎（北海道大学大学院理学研究院教授）を代表とする平成22年度採択の科学研究費補助金（基盤B）に、本研究プロジェクト学術研究員の吉田と平川がエフォート10%の分担者として参加することになった。本プロジェクトの研究内容と峻別した上で、RISTEXの支援により得られた諸成果を科研費の研究に接続させる試みとなる。

5. 研究開発実施体制

(1) 研究統括グループ

- ① 飯澤 理一郎（北海道大学区大学院農学研究院、教授）
- ② 研究統括
  - ・ 事務局と運営委員会の設置及び成果報告の取りまとめ責任
  - ・ アドバイザリーボードや協力者との関係維持と他の研究グループとの連携構築
  - ・ 双方向的リスクコミュニケーションのモデル化の提案：【課題5】

(2) 熟議型対話手法開発グループ

- ① 吉田 省子（北海道大学大学院農学研究院、学術研究員）
- ② 実施項目
  - ・ 熟議型対話手法の開発と改良：【課題1】 【課題2a】
  - ・ メディアとの対話の場を構築：【課題3】
  - ・ 政策への橋渡しを考慮に入れた社会実験としてのGM jury：【課題4】

(3) 情報発信グループ

- ① 柄内 新（北海道大学大学院理学研究院、准教授）
- ② 実施項目 情報発信（Webでの議論と対面による議論の接合可能性模索も含む）
  - ・ ホームページやブログの開設と農学交流広場の開設：【課題2b】
  - ・ メディアとの対話の場を構築：【課題3】
  - ・ 情報発信という側面からGM juryを支える：【課題4】

6. 研究開発実施者

① 研究統括グループ

氏名	所属	役職
飯澤 理一郎	北海道大学大学院農学研究院	教授
柄内 新	北海道大学大学院理学研究院	准教授
上田哲男	北海道大学電子科学研究所	教授
山際 睦子	北海道栄養士会食育推進委員会	委員長
吉田 省子	北海道大学大学院農学研究院	学術研究員
大原 眞紀	北海道大学大学院農学研究院	学術研究員
平川 全機	北海道大学大学院農学研究院	学術研究員
アドバイザーボード		
安居院 高志	北海道大学大学院獣医学研究院	教授
石原 孝二	東京大学大学院	准教授
大滝悦子	元北海道生活協同組合連合会	元理事
小泉 望	大阪府立大学	教授
立川 雅司	茨城大学	准教授
中村 由美子	北海道女性農業者ネットワーク	事務局長
久野 秀二	京都大学大学院	准教授
山口 裕文	大阪府立大学	名誉教授
宮入 隆	秋田県立大学	助教
鳥井 啓一	北海道公共政策大学院	研究員
杉山 滋郎	北海道大学大学院理学研究院	教授
丸子 剛史	北海道商工会議所連絡会	

② 熟議型対話手法開発グループ

氏名	所属	役職
吉田 省子	北海道大学大学院農学研究院	学術研究員
門平 睦代	帯広畜産大学（食品安全委員会プリオン専門調査会）	准教授（委員）
芝池 博幸	（独）農業環境技術研究所	主任研究員
山際 睦子	北海道栄養士会食育推進委員会	委員長
大原 眞紀	北海道大学大学院農学研究院	学術研究員
平川 全機	北海道大学大学院農学研究院	学術研究員

研究協力者		
高島 俊幾	北海道農政部食の安全推進局食品政策課	主査
竹林 孝	十勝総合振興局	局長
青田 善弘	十勝総合振興局	係長
服部 昭仁	三大学連携農学エクステンションセンター札幌サテライト	顧問
6月発令のコープさっぽろ組合員活動部理事		
竹田 加代	札幌消費者協会「食と健康を考える会」	代表
中村 由美子	女性農業者ネットワーク	事務局長
横井 允雄	帯広畜産大学	5年生
丸子 剛史	北海道農政部食の安全推進局食品政策課	主査

③ 情報発信グループ

氏名	所属	役職
栃内 新	北海道大学大学院理学研究院	准教授
上田 哲男	北海道大学電子科学研究所	教授
信濃 卓郎	(独)北海道農業研究センター	チーム長
大原 眞紀	北海道大学大学院農学研究院	学術研究員
平川 全機	北海道大学大学院農学研究院	学術研究員
吉田 省子	北海道大学大学院農学研究院	学術研究員
研究協力者		
竹田 加代	札幌消費者協会「食と健康を考える会」	代表
中村 由美子	女性農業者ネットワーク	事務局長
筑井 直樹	毎日新聞	編集委員

7. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など

(1) 論文発表

(国内誌   0   件、国際誌   0   件)

(2) 口頭発表 (国際学会発表及び主要な国内学会発表)

①招待講演 (国内会議   0   件、国際会議   0   件)

②口頭講演 (国内会議   0   件、国際会議   0   件)

③ポスター発表 (国内会議   0   件、国際会議   0   件)

(3) 新聞報道・投稿、受賞

① 新聞報道・投稿

特になし。

② 受賞

特になし。

(4) その他の発表・発信状況、アウトリーチ活動など

■ホームページ

サイト名:アクターの協働による双方向的リスクコミュニケーションのモデル化研究  
「はなしてガッテン」プロジェクト

URL : <http://www.agr.hokudai.ac.jp/riric/>

立ち上げ年月:2009年12月24日

■ブログ

サイト名:RIRiC「はなしてガッテン」プロジェクト

～RIRiC「はなしてガッテン」プロジェクトのスタッフが、日々のできごと  
や思いを綴ります。～

URL : <http://riric3.blog109.fc2.com/>

立ち上げ年月日:2010年1月18日

- 2009年12月4日(13:20～14:50)、食品安全委員会主催の食品の安全性に関する  
リスクコミュニケーション育成講座の一環として行われたアフタヌーンカフェ～「安  
全な食べもの」って何だろう?～に話題提供者(吉田)として参加